



## 英作文におけるエラー傾向の分析と添削指導

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増木, 啓二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00007675">https://doi.org/10.24729/00007675</a>

# 英作文におけるエラー傾向の分析と添削指導

増木 啓二\*

## A Method of Improving Students' English Writing — Through Analysis of Their Common Mistakes

Keiji MASUKI\*

### ABSTRACT

In order to improve students' English writing, teachers give them assignments such as writing a short essay, which can help them learn how to express themselves in their own English. However, students tend to have more difficulty in essay writing than in textbook exercises. Teachers, while checking their essays, find a number of common mistakes. In this paper, the author analyzes students' common mistakes and suggests a method of improving their English writing.

**Key Words:** English writing, error comment, common mistakes

#### 1. はじめに

英語教育において「コミュニケーション」が強調されるようになって久しいが、「聞く」「話す」ことはもちろん、eメールの普及等により「書く」力の強化も求められるようになってきている。しかし一方で、新入生達の中に基本的な英語が出てこない者や首をかしげたくくなるような英語を書く者が増えてきている現実もある。中学校段階での基本反復練習の不足が、特に「書く」ことに影響しているのではないかと筆者は考える。本校では近年3学年に2時間の「英作文」の授業を設けているが、やはりここでも基本的な文法事項の復習や練習、慣用表現や例文を覚えるといった演習は欠かせない。授業時間内では、これに和文英訳等の問題演習を行うのが精一杯といったところである。基礎の弱い学生が多い中では是非おさえておくべきポイントでありやむを得ないところではあるが、自分の考えや伝えたいことを「書く」力の養成やコミュニケーションをする態度の養成のためには、もっと「自分の英語」を考え書く機会を設けたいと思う。そこで、英作文を担当する教員はよく「自由英作文」などの課題を出して、その機会とすることがある。筆者も英作文を担当する際そうしてきた一人である。

筆者は、「自由英作文」を取り入れてゆくうちに、その主旨や効果には肯定的な確信を持ったものの、その「効率」についてはもう少し改良の余地があるのではないかという思いも強くなっていった。そして、思案の末、作文の添削にコンピュータを利用してみることにした。本報告において筆者は、過去3年間の自由英作文添削指導の概要と、その指導の中で得られた学生のエラー傾向のデータを紹介する。また、このデータの分析を元にして、英語を「書く」力の伸張の一方策を提示する。

#### 2. 「自由英作文」によるライティング練習

「自由英作文」という言い方でまとめたが、いくつかのパターンを筆者は併用している。ある程度の語数だけを指定して(筆者の場合、100~200語程度とすることが多い)、話題・内容は学生にまかせるパターンや、話題を指定するかまたは複数の話題から選ばせるパターン、特定の表現や構文を使うという条件を与えて作文させるパターン等である。

教員にとってこの方法のよい点は、課題の形をとるので授業時間をほとんど使うことなく、しかも学生に英語を使う練習をさせることができる点である。学生のほうも、それまでの自分の語彙や文法の知識と辞書引きの労力を駆使して自分の考えを英語にするという実践的な練習の機会を得ることができる。学生は概して、和文英訳

2003年4月9日受理

\*一般教養科 (Department of Liberal Arts)

などの教科書練習問題の場合より積極的に取り組む。英語に苦手意識を持つ学生が、話題によっては意欲的に作文を考えてくる例はよく見受けられる。作文に教員が肯定的なコメントを添えてやると、随分励みになる（NET=外国人英語指導員による場合は、さらにその傾向が強い）ようである。「自由英作文」は、特に「積極的に（書くことを通じての）コミュニケーションをはかろうとする態度を育てる」ことに関しては大きな効果が得られる方法である。

もちろんよいことばかりではない。作文提出を重ねる毎に順調に進歩していると思われる学生もいれば、全くといっていいほど進歩が見られない学生がいるのも事実である。添削が不可能な場合もある。訂正が多くて意欲を失ったように見える者もいる。同じような間違いを繰り返す学生も少なくない。そのような学生は、添削された結果を見て、間違っていたという事実と正解（ないしは例解）は分かっても、なぜ間違ったのか、自分がどういう点が弱いのか、どうすれば良い英文が書けるのか、といったことまでは理解できていないのである。

### 3. 添削指導の改良

筆者は数年前、このような問題点をふまえて、それまでの添削指導を改良してみようと思い立った。学生に、より正しくより良い英文を書けるようにすることに重点を置くなら、正解（例解）を与える前に学生に考えさせたり気づかせたりするステップをはさむ必要が出てくる。そのためには、添削と訂正を教員が一度にしまわずに、間違っていたり不適切であったりする箇所を指摘するだけで一旦学生に返却し、自分で考え訂正させて再提出させる、という方法が考えられる。実際、再提出をさせる添削指導の例の報告を聞くことがあって、筆者もこの方向での改良を考え始めた。

しかし、このような改良にも問題点は予想された。2段階を踏むことで教員の添削に要する労力は多大になる（1段階でも相当なものである）、かなりの数の学生が間違いの指摘だけではどう訂正すればよいか分からず途方にくれてしまう、などであった。

### 4. コンピュータの利用：「添削コメント」

こうしたいくつかの問題点を少しでも解消する方法として、筆者はレポート用紙に替えてコンピュータを利用することに思い至った。

以下に、2000年度から3年間取り組んだコンピュータを利用した自由英作文添削指導の概要を紹介する。施設としては、主に学内にあるコンピュータ教室-CAI室-

を使用した。なお、これはあくまで課題とそれに対する添削なので、授業時間は使うが、通常の「授業」とは主旨も展開形態も異なる点をご承知おきいただきたい。

- 1) 話題、語数、その他の条件等の提示(教員/教室)
- 2) 作文原稿作成(学生/家庭)
- 3) 原稿打ち込み(学生/CAI室)
- <4) 原稿スペルチェック(学生/CAI室)>\*
- 5) 添削コメント付加(教員/研究室、等)
- 6) 原稿訂正(学生/CAI室)
- <7) 訂正原稿再訂正(教員/研究室、等)>\*\*

\* は2001年度のみ \*\* は2002年度のみ

紙の上での添削では、紙面の関係もあって、間違った箇所を下線を引き正解を書き入れるということがほとんどになる。間違いの理由を示すコメントを入れることも少しはできるが、紙面が非常に見にくくなるので限界がある。コンピュータを利用することで、この点が大いに改善された。

5)の「添削コメント付加」の実際であるが、学生が打ち込んだ英文原稿ファイルを教員がコピーし、1行ずつ行をあげ、間違った箇所の下に「添削コメント」を入れてゆく、というものである。以下に例を示す。

I [go] [to] there with my friends last Sunday.

[i31: 過去形にすべき] [r10: 副詞の前に前置詞はいらない]

上例の英文の下の [i31: 過去形にすべき] などが、「添削コメント」である。この添削コメントによって、学生に自分の間違いがどのような種類のものなのかを知らせたり考えさせたりすることが可能になった。上例のように正解がわかりやすいものについてはコメントのみを、難しいと思われる場合には、[i30: 別の前置詞に:→ on] のように、正解を提示するようにしている。

添削コメントの左側の i31 などのアルファベットと数字は、各コメントの略号である。略号のうちアルファベットは各コメントを分類するためのもので、主に文法項目に基づいている。以下にその対応を示す。

- a: 綴り間違い b: 語(句)・表現の挿入、削除、訂正  
 c: 語順に関する間違い d: 代名詞、格変化  
 e: 冠詞、等 f: 名詞 g: 助動詞 h: 動詞  
 i: 基本時制 j: 完了形 k1: 進行形 k5: 受動態  
 l1: 疑問文 l5: 否定文 m: 不定詞 n: 動名詞  
 o: 分詞 p: 分詞構文 q: 形容詞 r: 副詞  
 s1: 感嘆文 s5: 比較 t: 前置詞 u: 接続詞  
 v: 関係詞 w: 仮定法 x: 間接疑問文、話法  
 y: 特殊構文(否定、倒置、祈願、等) z: 句読法

筆者は、自分のパソコンに全ての添削コメントを「単語登録」して、略号を打ち込み変換するとそれぞれのコメントが呼び出せるようにしている。学生の英文の間違いのパターンを判断した後、略号と各コメントの対応一

覧表を参照しながら、コメントを入れてゆくのである。これによって、紙の上での添削の場合ではやりにくかったコメント付加が効率よくできるようになった。なお、添削コメントは、2000年度と後の2年では若干の変更がある。総数は2001年以降のリストで365ある。

## 5. 学生の英作文におけるエラー傾向

筆者が従来の「自由英作文添削指導」に、コンピュータを利用した添削を取り入れた最も大きな理由は、添削指導をより有効かつ効率的なものにするためであったが、同時に、学生のエラー傾向を把握することで授業での解説や教材・練習問題をより適切なものにするのに役立てられるのではないかと期待もあった。そして、3年間添削指導を続けたところで、保存していたその記録を整

理してみた。方法は、先に紹介した添削コメントの略号を基に、学生の自由英作文の間違いを分類してピックアップしその数を出す、というものであった。これによって、それまでの添削指導で経験的に認識していた学生のエラー傾向を、データとして確認することができた。

以下の表1と表2で、そのデータの一部を紹介する。データの対象は、2000年度の4クラス2テーマ（うち2クラスは1テーマ）のべ6クラス分、作文数合計205；2001年度の2クラス4テーマ（うち1クラスは3テーマ）のべ7クラス分、作文数合計241；2002年度の3クラス2テーマのべ6クラス分、作文数合計207；総合計653編の英作文である。

表1には、頻度の高い添削コメントとその該当件数を上位30番目まで示した。表2には、各コメントの件数を分類項目別に合計して頻度順に並べたものを示した。

[表1]

		00年度 英文数計	01年度 英文数計	02年度 英文数計	00~02年度 英文数総計
		205	241	207	<b>653</b>
	添削コメント	間違い数	間違い数	間違い数	間違い数
1	[b20: 訂正:→]	435	531	603	1569
2	[a1: 綴り間違い]	262	292	178	732
3	[b30: 別の表現にすべき:→]	67	195	310	572
4	[e20: 定冠詞 the が必要]	134	136	161	431
5	[i31: 過去形にすべき]	136	124	136	396
6	[f20: 複数形にすべき]	82	152	125	359
7	[e10: 不定冠詞 a が必要]	90	129	107	326
8	[t10 前置詞が必要]	109	97	105	311
9	[b5:挿入:]	65	109	131	305
10	[b1:削除]	86	102	108	296
11	[t30: 別の前置詞に:→]	69	67	97	233
12	[b10: 別の単語に:→]	104	59	12	175
13	[e30: a(不定冠詞)にすべき]	20	18	49	87
14	[f10: 単数形にすべき]	25	30	23	78
15	[c1: 語順の間違い]	9	22	44	75
16	[i11: 三人称単数現在の-(e)s]	21	35	19	75
17	[e50: 冠詞が不必要]	16	21	31	68
18	[z21: 1語の単語ではない]	38	17	9	64
19	[t33: 「夏休みに」は, during the summer vacation]	26	9	28	63
20	[z11: 文頭の単語は大文字で始める]	21	24	12	57
21	[t31: 日, 曜日の前置詞は, on]	9	30	13	52
22	[e40: the(定冠詞)にすべき]	21	7	23	51
23	[z12: 文中の単語(固有名詞以外)小文字で始める]	14	25	10	49
24	[e80: 代名詞所有格が必要]	12	16	18	46
25	[u10: 接続詞が必要]	13	19	14	46
26	[i51: 未来形にすべき]	23	6	14	43
27	[r10: 副詞の前に前置詞はいらない]	19	15	9	43
28	[h61: be動詞が必要]	12	21	9	42
29	[h65: 主語が複数形なのでbe動詞はare(were)]	1	22	15	38
30	[f2: 固有名詞は大文字で始める]	12	16	9	37

[表2]

		00年度 英文数計	01年度 英文数計	02年度 英文数計	00～02年度 英文数総計
		205	241	207	<b>653</b>
	分類項目	間違い数	間違い数	間違い数	間違い数
1	b(10,11,20,30,31,61): 単語・表現の選択, 語法上の間違い	616	821	936	2373
2	e: 冠詞, 代名詞所有格	332	367	432	1131
3	a: 綴りに関する間違い	272	293	178	743
4	t: 前置詞	230	230	275	735
5	b(1,2,5,60,65,70): 語(句)の挿入・削除	166	241	260	667
6	d'e'f'h'i'l'q': 単数・複数に関する間違い	145	265	196	606
7	i: 基本時制	176	164	176	516
8	z: 句読法	145	85	63	293
9	h: 動詞	53	66	45	164
10	f: 名詞 (単数・複数に関するものを除く)	24	31	31	86
11	c: 語順に関する間違い (副詞等を除く)	16	24	45	85
12	k5: 受動態	25	32	20	77
13	r: 副詞	31	25	13	69
14	j: 完了形	23	23	22	68
15	u: 接続詞	20	27	21	68
16	k1: 進行形	16	24	25	65
17	q: 形容詞	11	24	20	55
18	s5: 比較	11	8	12	31
19	m: 不定詞	6	14	6	26
20	d: 代名詞, 格変化	4	12	5	21
21	n: 動名詞	0	15	6	21
22	v: 関係詞	4	7	10	21
23	o: 分詞	2	11	7	20
24	g: 助動詞	4	6	2	12
25	l5: 否定文	1	7	0	8
26	w: 仮定法	2	3	1	6
27	l1: 疑問文	1	4	0	5
28	s1: 感嘆文	0	0	2	2
29	x: 間接疑問文, 語法	1	0	0	1
30	p: 分詞構文	0	0	0	0
31	y: 特殊構文 (否定, 倒置, 譲歩, 祈願, 等)	0	0	0	0

## 6. エラー傾向の分析・考察

表1にあるように、最も多く使用された添削コメントは、「訂正」である。この「訂正」と3番目の「別の表現に」、12番目の「別の単語に」等分類項目bのコメントが、数多く上位に見られる。項目別に合計した数値を示した表2においても、この項目bが、2番目の項目eの2倍以上で断然のトップである。複合的な間違いや簡単に説明しにくい間違いを「訂正」や「別の表現に」にまとめることが多かったことを割り引いても、文法用語で説明できる間違い(d～y)よりも、項目bのような語句、表現の選択等に関する間違いの方がずっと多いことが明らかになった。

表2の2番目は、「冠詞」に関する間違いである。冠詞の要不要、aかtheか、これはある程度の文法知識の

ある者にとっても難しいところであるので、多数の間違いがあるとは予想していたが、冠詞が文法項目の中では1番間違いが多い項目、という集計結果となった。内容を見ると、迷った上での間違いと思われる例から、全く冠詞に対する意識がないことからの間違いと思われる例まで、幅広くあった。文法を学習する際にはそれほど多くの時間が割かれることのない項目であるが、特に自由英作文に取り組みさせる際には、よりつつこんだ説明と練習が必要であると痛感させられた。

これに続くのがスペルミスである。非常に初歩的なミスであるが、いっこうに数が減らない。2002年度の数値が他の前2年より減っているのは、この年だけワープロソフトに付属のスペルチェックの機能を使ってもよい、としたためであると思われる。

4番目で文法項目としては2番目に出てくるのが、「前

置詞」に関する間違いである。日本語の助詞と対応するところがあるが、そのために前置詞の選択の判断を誤ったと思われる例を多く見かけた。また、基本的な前置詞の区別ができていない例も多い。前置詞の項目には入れていないが、他動詞・自動詞に関連した前置詞の要不要の間違い、副詞に前置詞をつける間違い（r10: 表1-27番目）もかなりの数に昇っている。

6番目に「単数・複数に関する間違い」が入っている。これは、当初は分類項目としてはあげていなかったが、添削を続けてゆくうち、名詞・形容詞・動詞等複数の項目に渡って、広くこれに関連する間違いが見られたため、データ集計の際1つの分類項目にしてみたところ、このような結果となった。これは、日本語ではほとんど区別されないものであるため、意識が低く間違いやすいのではないかと筆者は推測している。

7番目は「基本時制」である。特に、過去形にすべきところを現在形や原形にしている例が多く見られる（i31: 表1-5番目）。これは、日本語では過去形と現在形を一段落中に混在させるようなことがありうることの影響もあるのではないかと推測する。また、未来形にすべきところをできていない例（i51: 表1-26）も多く、時制も意識が低く間違いやすい項目であることがうかがえる。他に、筆者の予想よりは低い数値であったが、三人称単数現在の -(e)s の間違い（i11: 表1-16）は、逆に三人称単数現在でないのに -(e)s をつけてしまう例と合わせて、やはり相当数にのぼっている。

8番目の「句読法」は、分類項目としては「句読法」としたが、文章を書く上でのルールに関する間違い全般を広くこの中に分類した。このうち主なものは、1語の単語ではない（具体的には every day を everyday とするなどの間違い；z21: 表1-18）、文頭の単語を大文字で始める（z11: 表1-20）、文中の単語を大文字始める（z12: 表1-23）などであった。その他では、単語とカンマ、ピリオドの間にスペースを入れてしまうなど、タイピング上のルールに関する無知と言ってもいいものが見られた。なお、2001年度以降は作文入力欄の上に句読法に関する注意を入れておくようにしたために、2000年度に比べると間違い数は減っている。

9番目「動詞」に関する間違いは、時制、単数・複数に関わるものを含めなかったため、相対的に数が少なくなっている。その中では、動詞の要不要、自動詞・他動詞の用法に関する間違いが多い。

10番目の「名詞」でも、単数・複数に関わるものを除くと、固有名詞は大文字で始める（f2: 表1-30）など、語形に関するものがほとんどである。

11番目に、「語順に関する間違い」が来ている。これは筆者が注目していた分類項目であった。データを見

た実感としては、予想していたほどの数値ではなかったが、他の文法項目に分類したものや「訂正」項目に含めた複合的な間違いの中にも、語順に関わる間違いは相当数見られた。綴り間違いや句読法の間違いのような小さなミスとは違う、重大な間違いだけに、深刻な問題であるととらえている。

続く12番目、14番目、16番目に「受動態」「完了形」「進行形」といった動詞の活用に関連した項目が並ぶ。これらの項目は文法の演習などを通じて比較的多く練習してきたところである。その意味では他の文法項目より間違いの頻度は低く、練習の成果はあがっていると言えよう。しかし、反面、文法練習問題をしている時には間違わないようなことを実際の英作文の場面では間違ってしまう例も少なくないように感じられる。受動態のbe動詞を落としてしまう（添削コメントの頻度順で41番目）、「行ったことがある」の意味の現在完了形 have(has) been が書けない（同47番目）、進行形にしない動詞に対してやそうすべきでない場面で進行形を用いてしまっている（同31番目）、などがその例である。

表2に戻り、13番目は「副詞」である。この項目で最も頻度の高い間違いは、副詞の前に前置詞を入れてしまうもの（具体的には go to there, come to home など；r10: 表1-27）であった。続いて、形容詞との使い方の混同、使う位置の間違いなどがあがっている。

15番目「接続詞」の項目では、接続詞を介さずに節と節を結びつけてしまう間違いが目立った（u10: 表1-25）。他に、接続詞の後にもかかわらず主語・動詞を欠いている間違いなどがあつた。

17番目「形容詞」で最も多い間違いは、名詞との用法の混同であった（I was safety. のような間違い；コメント頻度順51番目）。同様に、副詞との用法の混同の例も少なくない（We felt happily. など；同64番目）。このように、名詞・形容詞・副詞等における品詞とその使い方の違いが理解できていない例は目立ち、気がかりな点でもある。これとは別に、現在分詞型と過去分詞型の形容詞の用法の混同もよく見られる（interesting と interested の混同などの間違い；同59番目）。

以下、18番目の「比較」から、「不定詞」などの準動詞、「代名詞」、「関係詞」、「助動詞」、「否定文」が続いている。さらに下位には「仮定法」、「疑問文」、「感嘆文」、「話法」などがあるが、どの項目も間違いの合計が2桁にも達していない。最下位の「分詞構文」と「特殊構文」に至っては3年間で1件も登場していない。これらは、文法学習においては、比較的詳しく説明がなされ問題練習の量も多い項目であるが、間違いの数は冠詞や前置詞に比べると多くはない。もちろん、項目によって使われうる場面の数が違うのであるから、単純

な比較はできない。否定文、疑問文などについては、使われる頻度は割合高いが間違いは少ないので、それまでの学習・練習が身につけていると肯定的に解釈できよう。また、準動詞、代名詞、関係詞、助動詞といった項目も（筆者の主観的な観測であるが）、ある程度使用されていてしかも間違いの割合はそれほど大きくないので、これも学習の成果があがっていると言えよう。しかし、仮定法、話法、分詞構文などに関しては、学習の成果で間違いが少なかったというよりは、単に作文に用いなかったと言うほうが正しい。これによって、仮定法や話法は教える必要がないとしてしまうのは早計であろうが、ライティング指導に限って言えば、解説や問題練習の重点の置き方を再検討する必要があると感じさせられた。

## 7. 添削コメントおよび添削指導の改良

以上が、3年間の自由英作文添削指導の概要と学生のエラー傾向のデータ、そしてその分析である。筆者は、これらをふまえて、今後、添削コメントおよび添削指導を改良してみようと考えている。

添削コメント改良のポイントは、文法項目や品詞別の分類を中心とした現在の分類法の一部見直し、頻度の低いコメント（総数 365 のうち1度も用いられなかったコメントの数は 165 にのぼった）の整理・統合、逆に「訂正」など頻度の高いコメントをもう少し細かい添削コメントに分ける、などである。

添削指導法については、添削コメントを入れるだけでなく、その間違いの過去の例と正解を参照できるようにしたいと思っている。また、現在のコンピュータ上の添削・訂正は、学生にとって使い勝手の悪いところもいくつかあるので、この点も改善したい。

以上の主に技術的な面での改良以外に、添削-訂正の過程の提示の仕方に変化を持たせるなどの、指導法の改良も考えられる。これまででは、個人個人に対する添削指導がほとんどであったが、ある学生の作文を題材にモニター上に添削と訂正の様子を全体に提示する、ペアやグループで互いに訂正させる、などの方法も「エラー傾向」を意識させるという点で有効な手段と思われるので、取り入れてみたい。

## 8. ライティング力向上の方策

筆者は、自由英作文添削指導がライティング力向上の一つの方策になると確信している。しかし、これだけでライティング力の全てが養成されるとはもちろん考えていない。むしろ、始めに述べたように、基本的な文法の理解、反復練習、表現・例文を覚える、といったことは

欠かすことができないと思っている。要は、練習のための練習で終わらないよう、練習と応用を組み合わせればよいのであり、基本反復練習がないと自由英作文等の応用練習は生きてこないと考える。

もう少し具体的な話に戻り、筆者が考えるライティング力の養成・向上の一つのモデルを提示してみたい。なお、これは、一般的な1学年で文法を2学年で英作文を学習するというケース（本校の平成15年度以降のカリキュラムの場合と同じ）を想定している。

### 1) 基本的文法の理解・反復練習

文法の授業では、昔ながらの文法学習形態で基本的には問題ない。ただし、ライティングを意識して、文を作る際の基礎にあたる動詞-時制や主語-動詞-目的語(等)といった文の構造には、特に重点をおく。文法事項を理解するとともに具体的な例文を繰り返し練習させる。

### 2) ライティングに関わる文法事項の重点的な復習

英作文の授業では、文法事項の復習も必ず出てくるが、1年次と同じような繰り返しにならないよう、実際の英作文で間違いやすい、冠詞や前置詞の選択、時制の選び方、単数・複数などに重点を置く。これらについては、詳しい説明と問題演習を行う。

### 3) 教科書の和文英訳等の問題演習

教科書の和文英訳などの問題演習が授業のメインであることに変わりはない。しかし、一般に問題量はかなり多いので、取捨選択をする。また、日本語の発想による不自然な英語や間違った英語を作らせないように、学生の注意を喚起する。

### 4) 「表現」に関わる例文を覚える・使う

様々な場面で用いられる表現を含んだ例文を覚えさせる。また、その表現を含む英文を作らせる。

### 5) 自由英作文

一定量の英文を書かせる。テーマを与える、表現を指定する等の変化をつける。書かれた英文に対しては、個人個人に添削指導をする、全員を前にモデル添削をする、等、必ずフィードバックを行う。

### 6) 発表活動

英語の新聞を作る、英語によるプレゼンテーションを行う、などの活動を通じて、英語を書く応用練習をさせる。

## 9. おわりに

今回、自由英作文指導を通して得られたデータを整理する中で、筆者は、いくつかの意外な発見もした。方策とともに、このデータも何かヒントになるところがあれば幸いである。